

# 航空自衛隊百里基地研修

令和4年10月7日、航空自衛隊百里基地研修の機会を得たので、その概要を報告する。

## 1. 研修の目的

首都圏に最も近い戦闘機部隊が配備された百里基地において、実任務中の航空機等の運用状況を見学し、隊員との意見交換を行うことにより、SJAC担当業務や会員企業の役割を再認識するとともに、官民の相互理解を深めるための資とするべく、技術部および調査部にて基地研修を実施した。

## 2. 航空自衛隊百里基地

### (1) 基地の概要

茨城県小美玉市に所在する航空自衛隊の基地で、1千数百名の隊員が24時間365日、対領空侵犯措置任務および災害派遣任務に当たっている。

基地の総面積は約456万㎡あり、南北方向に長さ2,700mの平行する2本の滑走路を有する。滑走路を挟んで西側には、2010年に民間共用化された茨城空港が営業しているが、管制を含め飛行場は航空自衛隊が管理している。

所在する部隊は、中部航空方面隊隷下の第7航空団および中部航空施設隊第3作業隊、航空救難団隷下の百里救難隊、航空戦術教導団隷下の基地警備教導隊、航空保安管制群隷下の百里管制隊および移動管制隊、航空気象群隷下の百里気象隊などがあり、F-2A/B戦闘機、T-4練習機、U-125A救難捜索機、およびUH-60救難ヘリコプターを保有している。

基地の大きな特徴としては、首都圏に所在する唯一の戦闘航空団を擁する基地であり首都圏防空の重要な任務を持つ一方で、過去の用地取得の経緯から誘導路が「く」の字型に

曲がっており、戦闘機等の運用上、相応の配慮をもって対応している、とのことであった。

### (2) 基地の歴史

昭和13年に旧海軍の百里ヶ原飛行場として設置されたが、戦後は満州国などからの引揚者の戦後開拓用の農地として開放された。しかし昭和30年には地元から基地誘致運動が起こり、昭和33年に航空自衛隊百里分屯基地が発足し、昭和41年7月に百里基地として正式に発足した。

その後、平成22年3月11日に茨城空港が開港、官民共用が開始され、スカイマーク、台湾のタイガーエア、中国の春秋航空および韓国のイースター航空が乗り入れることとなった。

## 3. 部隊見学

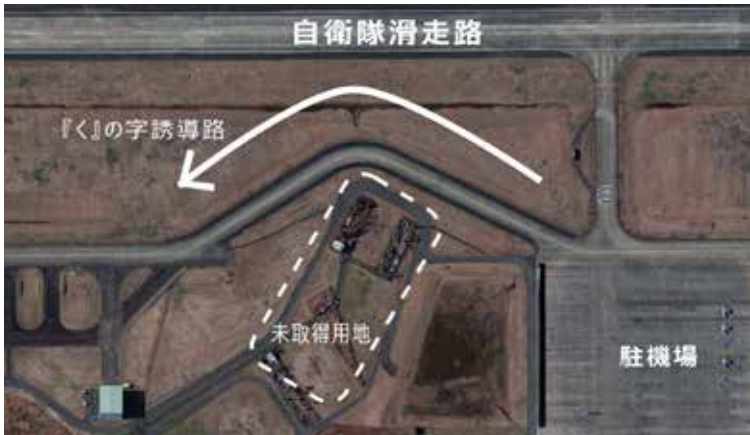
### (1) 管制室・管制塔

管制室では管轄空域の監視を行う様子の説明を受け、続いて登らせて頂いた管制塔では茨城空港から出発するスカイマーク機の誘導や、鳥取県の美保基地から飛来したKC-46A空中給油・輸送機の着陸管制を行う、航空自衛官の姿を見ることができた。また、民間エプロン側には誘導路が無いので、滑走路端まで移動して少し広くなったエリアでUターンする様が見てとられた。

なお、スクランブル発令の際には全てに優先して戦闘機を発進させる、とのことであった。



百里基地全景（Google mapより）



特徴ある『く』の字誘導路（Google mapより）

## (2) エンジン小隊

我々の研修のために、F-2戦闘機用F110エンジンを完成状態および分割状態で展示していただいた。

通常では目にすることができないエンジン内部や、単品のタービン・ブレードを手にすることができ、大変貴重な経験ができた。

## (3) 第3飛行隊

第3飛行隊は量産型のF-2戦闘機が最初に配備された飛行隊であり当時は三沢基地に所在していたが、令和2年3月、第302飛行隊のF-35Aへの機種改編および三沢基地での部隊建設に伴い、入れ替わりに百里基地へ移駐となった。

格納庫では、そのF-2A量産初号機である503号機を間近に見学することができた。

#### (4) 百里救難隊

救難隊格納庫ではUH-60救難ヘリの機体見学を行い、作戦機特有の装備であるチャフおよびフレア発射器に関する説明も受けた。

今後、なお一層迅速な要救助者の位置特定および救難のためには、近年話題となっている人工衛星を利用した捜索・救助システムの導入も一案ではないかと考える。

#### (5) 基地司令表敬訪問

第7航空団司令兼百里基地司令 石村尚久空将補、および副司令 大西健介1等空佐への表敬訪問および懇談を行った。

石村空将補は、本年3月号にてご紹介した松島基地司令と全く同様、官民間の意思疎通が以前と比べて少なくなっていることに対する問題意識や、より一層の官民相互信頼と連携が必須である、とのお考えをお持ちであった。

また民間技術の利用に関しては、例えば解像度4Kが標準となっているゲームソフトに自衛隊独自のデータをアドオンすることにより開発コストを抑えたシミュレーターができないか、などの案を伺った。

#### 4. 所感

官民間の意思疎通および意見交換の必要性については、改めて認識することができた。特に各基地とも現場レベルでの期待が大きいことが分かったため、会員企業との意見交換の機会を設けることが可能か検討を進めていきたい。

最後に、悪天候の中、工業会からの研修申し込みを快くお受け頂き、手厚い対応をして頂いた百里基地司令以下、基地広報班および所属隊員の皆様に心より厚く御礼申し上げます。



F-2戦闘機 量産初号機の前で

〔(一社)日本航空宇宙工業会 技術部部長 原野 清隆〕